里山の地域づくりとイノシシとの共存

Wild Boar and Man : Living together

高橋　春成*
Takahashi Shunjo
文学部地理学科

はじめに

長い人類史の中で人びとは、たえずまわりの環境に働きかけ、またまわりの環境から影響を受けて生活を営んできた。まわりの環境には、地圏、水圏、気圏、生物圏といわれるようなものがあり、これらは人びとの生活の舞台となってきた。

人びとは、このような環境とのやりとりの中でそれぞれの文化や社会をはぐくんできた。なぜなら、このような環境は場所によって異なるからである。地域とは、このような過程の中で形成されてきた‘個性をもった意味のあるまとまり’ととらえることができ、そこにはその地域特有の社会がみられる。

ところで今日、わが国の中山間部では地域社会の崩壊が指摘される。これらの地域はいわゆる里山といわれるところで、特に高度経済成長期以降の人口流出や高齢化などにより、これまでの地域社会が維持できなくなっているところがみられる。そして、それにかかわってさまざまな問題が生じている。その１つが獣害問題である。

獣害とは、イノシシやサル、シカなどの獣（けもの）による農作物や林産物などへの被害を指す。獣害は古くからみられる被害であるが、地域社会にパワーがある時には獣害に対しても対応力をもてるが、その力が弱まると獣たちの外圧に屈してしまう。そして、その結果ますます地域社会が疲弊するという事態におちいる。

たとえばこのような時、このような地域をどうしたらよいのかを考える必要が出てくる。

Ⅰ．２極化する日本人のイノシシイメージ

わが国では、高度経済成長期以降都市部への人口集中が顕著になり、都市あるいはその周辺の人口が極めて多くなった。それと連動して、山間部や中山間部からは人口が流出し、いわゆ

平成14年10月８日原稿受理　文学部

表1　イノシシのイメージ

	都市部住民 283人（%）	被害地住民 136人（%）
ぼたん鍋	130(46)	16(12)
イノブタ・ブタ	42(15)	5(4)
丹波篠山	20(7)	
田畑を荒らす	14(5)	69(51)
猪突猛進・突進	91(32)	22(16)
気が荒い	8(3)	
鼻息・鼻	8(3)	
牙	28(10)	
ウリ坊	42(15)	
親子連れ・母子	14(5)	
六甲	17(6)	
動物園	8(3)	
かわいい	8(3)	
干支	45(16)	
花札	11(4)	
無記入		38(28)

る過疎化が進行してきた。このような中で、都市部の多くの人びとの生活はイノシシなどの野生動物とは直接にかかわりのないものになり、彼らの存在は人びとの生活から遊離したものとなっている。一方、中山間部などではイノシシなどによる被害が多発し、今や人びとの関心はこの一点に集中しているのが現状である。

表1は、大阪の都市部の住民と滋賀県高島町の中山間部のイノシシ被害地の住民に、イノシシのイメージについてアンケート調査を行った結果である。ここでは、「"イノシシ"と聞いて、連想し思いつくことをできるだけ多くあげてください」という設問をもうけ、人びとのイノシシイメージをみることにした。

表をみると、イノシシに対する都市部の住民と被害地の住民のイメージに明らかな違いがあることがわかる。大阪の都市部の住民のイノシシイメージは、"ぼたん鍋"、"イノブタ・ブタ"といったイノシシの肉料理関連のもの、"猪突猛進"や"ウリ坊"といったイノシシの性質や姿・形関連のもの、"干支"といった暦法関連のものが主となっている。これらのイメージは、おそらくイノシシと直接に接することがない現代の多くの日本人に共通的なものであろう。そして、このようなイメージは、わが国の人びとのイノシシイメージの1つの典型的な型になっていると思われる。

一方、滋賀県高島町の人びとのイメージはどうであろうか。ここでは、"田畑を荒らす"といった害獣イメージが突出している。他のイメージが極めて少なく、また無記入が多いのも特徴である。害獣であるイノシシに対する気持ちが、このような回答結果を生み出しているのであろう。このようなイノシシイメージは、イノシシの被害のみに関心が集中している現代の中山間部の被害地の多くの人びとに共通したものであろう。そして、このようなイメージもまた、わが国の人びとのイノシシイメージの1つの典型的な型を形成していると思われる。

現代のわが国の多くの人びとのイノシシイメージは、おそらくこの2つの極に分裂していると思われる。

Ⅱ．地域づくりの中でイノシシを考える

「昔から、イノシシはクマ、サル、ウサギ、キツネ、タヌキなどとともに極めてなじみの深い動物である」と、ほとんどの人が感じていると思う。イノシシは他の動物とともに里山の代表的な動物であり、人びととなじみ深い関係をもち続けてきたと・・・。

しかし、いざそのイメージをみてみると、現代の人びとのイノシシイメージは極めて偏りがある。なぜ、このようなイノシシイメージができあがっているのであろうか。

それは、現代の多くの人びとの生活が都市中心となり、生活の中でイノシシと直接に接触することがほとんどなくなったことが1つの大きな理由である。また、もう1つの大きな理由は、生活の中でイノシシとの直接的な接触が生じている中山間部などで、それが農作物被害をめぐるイノシシとの攻防1点に集約されており、しかも、その多くの地域社会が過疎化や高齢化で足腰が弱まり、獣害といった外圧に抗しきれない状態にあるためである。

地域づくりの中でイノシシを考えていく場合、このような偏りのあるイノシシイメージは何とかしていかなければならない。

（1）都市部の人びともイノシシに関心をもとう！

都市部の人びとは、自分たちの生活がイノシシと直接にかかわっていないため、イノシシとのかかわりに必然性を感じることはほとんどないであろう。しかし、たとえば、都市部の人びとはイノシシが生息する中山間部に旅行することがあるだろうし、またイノシシとの攻防の中で生産されるこれらの地域の農産物を購入し食べることも多いにちがいない。このように考るだけでも、都市部の人びとがイノシシとは無縁だとはいえないのである。それに、出身地が中山間部にあるという人も多いであろう。そのような人びとにとって、中山間部は自分の田舎であり故郷である。さらに言うと、ご先祖さまの土地である。その土地に思いを馳せ、その行く末を案じるのは自然の成り行きではなかろうか。

だから、是非、都市部の人びとには中山間部などに生息するイノシシに関心をもってほしいのである。都市部の人びとに望まれるイノシシ理解のポイントは2つある。1つは、イノシシの生態や形態などに関して正確な知識を得ることである。もう1つは、わが国におけるイノシシと人びとのかかわりの長い歴史の理解であり、中山間部などで生じている今日のイノシシ問題の理解である。

（2）中山間部の地域づくりとしてイノシシ問題を考えよう！

先にイノシシ被害が深刻な中山間部の人びとのイノシシイメージの例をみた。そこでは“害獣視”が突出し、都市部でみられたような“ウリ坊”や“かわいい”といった雰囲気のイメージはなかった。これは、イノシシによる被害がそれだけ深刻だということであるが、この地域の人びとのイメージもまたこのままではよくないであろう。

このような地域の人びとにも、まずはイノシシがどのような動物であるのか、その生態や行動に関する正確な情報を知ってもらう必要がある。これは、都市部の人びとの場合と同じことである。

また、イノシシとの関係史やイノシシ問題についても理解してもらう必要がある。特にここでは、実際にイノシシ問題が生じているところであるから、その実態の把握と、イノシシ問題への対応のあり方を考えていく必要がある。ポイントはいくつかあるが、重要な点の1つは次

写真１　調査用に捕獲され、発信機を付けられたイノシシ

写真　テレメトリー調査
（発信機を付けられたイノシシを追跡する）

のようなことであろう。

それは、イノシシの生息動向や被害問題が、その土地の人びとの土地利用や社会の構造と極めて密接に関係しているということを理解してもらうことである。そして、先人である先祖の時代のイノシシとのかかわり方を参考にしながらも、新たなかかわり方を模索することである。

ところで、このような施策を効果的なものにしていくためには、中山間部の地域社会に活力を呼び戻さなければならない。多くの中山間部では人口減と高齢化が進んでいるのだから、外部から人材を受け入れたり、あるいは少ない人数で地域の資源を有効に活用する方策を考えなければならないのである。このようなとき、イノシシを有効に活用する工夫や仕掛けが何かないであろうか。このような点について考える必要がある。

なお、本研究では、イノシシの生態や被害の実態を分析するため、数頭のイノシシを捕獲し、それらに発信機を装着し、テレメトリー調査などを行なった（写真１・２）。科学的なデータを入手し、都市部の住民や被害地の住民に客観的なイノシシ情報を提供するためである。

（3）イノシシをめぐるネットワークをつくろう！

これまでみてきたように、イノシシに関して、都市部も中山間部もそれぞれ問題をかかえている。都市部の人びとにとっては、イノシシは動物園の世界、絵本の世界の動物となっているので、イノシシの実像にふれる体験が必要となっている。一方、中山間部は、高齢化や人口減によりイノシシの外圧に抗しきれなくなっており、できればひろく人材を求め、地域に活力をつけることを考えることも必要となっている。

このように考えると、都市部の人びとを中山間部にひきつける工夫や仕掛けがあれば、両者

の悩みは一挙に片付く、とまでいかずとも、けっこううまくいけるのではないかと思うのである。

1つの案を考えてみよう。まず、中山間部のいくつかの地域にイノシシを中心としたフィールドミュージアム・エコミュージアム的な構想を導入してはどうだろうか。おおまかな構想を描いてみよう。

そこでは、外部からきた人は、田畑やその周辺の里山などで四季折々のイノシシのフィールドサインが観察でき、イノシシの生態や行動を学ぶことができる。また、イノシシの被害対策に地域の人びとがどのような工夫をしてきたのかを知ることもできる。さらには、イノシシの捕獲の方法や捕獲したイノシシをどのように利用してきたのかを知ることもできる。

中山間部を訪れた人びとは、かつて築造された猪垣の跡をたどったり、あるいは復元したり、さらには実際にイノシシの被害対策の作業を手伝ったりする。また、イノシシ肉の料理を味わったりする。そして、このような地域の人びととの交流の中からイノシシやイノシシ問題を理解し、自分の先祖の土地を思い、さらには日本人とイノシシの関係史に思いを馳せるのである。運がよければ、イノシシの捕獲や解体などにも立ち合う機会があろうし、多くの貴重な体験ができる。

イノシシをめぐるネットワークをつくろう！
（佐藤杏子作）

中山間部の人びとは、外部から人びとを受け入れることによって地域に活力を得、またそれらの人びとにイノシシ問題とは何かを説くことによって、地域に生きてきた先人の生活史を再確認し、自分を見つめなおすことができよう。

宿泊は農家でまかなったり、空き家になった家屋を有効に使う方法もある。また、イノシシの捕獲だけでなく、イノシシやイノブタの飼育なども合わせて行い、肉の安定供給や商品化を行い、さらには飼育施設の見学などを取り入れていくこともできるであろう。現在多くの中山間部には、イノシシ肉の流通やイノシシ・イノブタの生産などがみられることから（神崎・大東、1997；高橋、1995)、このような基盤を整備し地域づくりに活かすのである。イノシシと人びとのかかわりに関する資料館があってもいい。

このようにしてつくられた中山間部のいくつかの地域のイノシシをめぐるネットワークの核が成果を出せば、その波及効果は残りの中山間地域にも及んでいくであろう。このような都市と農村の交流では、いろいろなレベルでの交流の推進が望まれる。特に、中山間地の近隣にはそれぞれ中・小の多くの都市がみられることから、このような地方レベルでの交流が推進されることが重要である。たとえば、ある流域の中・上流部の中山間地域と下流部の都市が、1つの流域というくくりの中で結びついてもよいだろう。そこでは、個人やグループでの交流が活

発に行われることを期待したい。このような交流に意義を見出した人びとがそれを継続していけば、交流の底辺がひろがり、また相互理解の中から中身の濃い交流ができると考えるからである。そして、このような交流を通して、中山間部に定住していく人が出てくればよい。

（4）新たな“まなざし”を構築しよう！

さて、このような試みなどを通して、イノシシやイノシシ問題を理解し、イノシシイメージを改め、地域づくりをすすめることは有意義であると考えるが、動物との間に親密性や連続性をもつ、殺生や肉食を避けるといった日本人の伝統的な動物観といったものを、ここではどのように考えていけばよいのであろうか。イメージが表層的なものであるのに対し、伝統的な動物観は基層的なものである。したがって、そう簡単には無くならないし、また急激に変化をするものでもない。いまなお人びとの動物観に伝統的なものが多かれ少なかれみられるのは、そのためである。

我々の先祖は、日々の生活の中で生きものを捕獲したり採取してきた。そのようにして、人生を送ってきたのである。そこでは、人びとにとってこれらの生きものは生活の糧であった。また、被害を与える生きものに対しては様々な防御をし、時には捕獲もしてきた。我々の先祖は、このように生きものと密接にかかわってきたのであるが、そこには生きものに対する特有の見方があったように思う。それは、“お互いに生きている”、“みんな（皆）命がある”、“その御蔭（おかげ）で生きている”といったものであろう。

多くの集落にはお寺や神社があり、人びとは土地を耕し、川で魚を捕り、山で獣をとることもある生活の中で、仏事や神事にはげんできた。そして、生きものに対する親近感や慈悲の気持ちを確かなものとし、自分たちがその御蔭で生かされ、また先祖の御蔭で今日の自分があるといった生活の規範を会得してきた。我々の先祖の生活はこのような規範の中にあり、土地を耕すにしても、生きものを捕獲・採取するにしても、単なる行為ではなく、心がはいったものがあった。このような人びとは、被害をこうむっていても、むやみに動物を殺戮することがなかったし、肉を食べるにしても感謝の念をもってそれを食べたのである。

地域づくりの中でイノシシ肉の活用をはかったり、イノシシの科学的管理の中でイノシシの捕獲やイノシシ肉の活用を考えていくにおいても、このような伝統的な動物に対する姿勢を考慮し、それに対応していく必要があろう。要は、伝統的なもののよいところを活かし、修正を加える必要があるならば、それを指摘すればよいのである。

今、世界的な課題として“自然や野生動物との共存”がとりあげられているが、それがめざすところと“お互いに生きている”、“みんな命がある”、“その御蔭で生きている”といった見方は、波長が大いにあうのではなかろうか。我々は、幸運にも、伝統的に、自然や野生動物と共に生きる姿勢をもっているのである。これは貴重な財産であるから、我々はこのような伝統的な文化をあらためて見直し大切にすべきであろう。

このような伝統的なものの有り難いところを大切にし、イノシシやイノシシ問題の理解をすすめ、イノシシのイメージを改めていけば、そこにはイノシシに対する新たな“まなざし”が

構築されるに違いない。イノシシとの共存を考えるには、イノシシの科学的な管理手法を確立し、地域の構造を検討する必要があるが、その中でイノシシに対する人びとの精神的なバックボーンをしっかりとしたものにしていかなければならない。新たな“まなざし”の構築が望まれるゆえんである。

（本研究は、先に出版した、高橋春成編（2001）：『イノシシと人間－共に生きる－』古今書院、に収めた。ここに示したものは、その概要の一部である）

【文献】

神崎伸夫・大束絵理子（1997）：近・現代の日本におけるイノシシ猟及びイノシシ肉の商品化の変遷、野生生物保護　2－4、169-183頁
高橋春成（1995）：『野生動物と野生化家畜』大明堂